

バーンチエン

—世界遺産として、地域のシンボルとして—

白石華子*

はじめに一蓮と土器が描かれた電車

ある日、私はタイの首都バンコクの高架鉄道（BTS）の駅で電車を待っていた。ふと反対側のホームに視線を向けると、車体全体に広告が施された、いわゆるラッピング車両が停まっていた。BTSのラッピング車両自体はさして珍しいものではないが、そこに描かれていたものに少々面食らった。「蓮」と「土器」である。それが何を意味するのかを理解し、写真を撮らなければと思った時には、既に電車は走り去ってしまっていた。

描かれていたのは、ノーンハーン湖の蓮とバーンチエン（Ban Chiang）遺跡出土の土器である。タイ東北部のウドンターニー県にあるノーンハーン湖は、一面に紅色の蓮が咲くことから「タレーブアデー（紅い蓮の海）」という別名をもつ。そして同じくウドンターニー県に所在するバーンチエン遺跡は、独特の彩文が特徴の土器が多数出土したことで知られている。どうやらそのラッピング車両は、ウドンターニー県の観光プロ

モーションの一環であったようだ。

バーンチエン遺跡とは

2015年の秋、私はタイの考古学に関する調査のためにバンコクに滞在していた。タイ滞在はこれまでも何度も経験していたが、ユネスコの世界遺産に登録されているタイ国内の遺跡のうちバーンチエン遺跡だけは訪れたことがなかった。バーンチエン遺跡は「地味系世界遺産」、「がっかり系世界遺産」と揶揄されており、¹⁾ これほどの世界遺産ブームのなかでもバーンチエン遺跡訪問が含まれる日本人向けのパッケージツアーなどは皆無である。しかし遺跡に対する考古学的な関心もあり、かねてから一度は訪れてみたいと思っていた私は、件のラッピング広告によってさらにバーンチエンへの思いを募らせた。そして偶然にもその1ヵ月後、ウドンターニー出身の知人の里帰りに同行してバーンチエン遺跡を訪れる機会を得た。

バンコクのドーンムアン空港からウドン

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) こうした評価は実際にバーンチエンを訪れた観光客による、口コミや旅行記のなかに散見される。世界遺産（なかでも遺跡）といえ、たとえば東南アジアではカンボジアのアンコールワットやインドネシアのボロブドゥールなどのような豪華なもの、壮大なものであるというイメージに基づく評価であると思われる。



写真 1 空港のレリーフ

ターニー空港へは 1 時間ほどである。空港についてまず目に飛び込んできたのは、土器作りの様子を表現した木彫りのレリーフであった（写真 1）。上部にはタイ文字で「バーンチエン」と書かれている。そして手前にはバーンチエン土器の模造品が並んでいる。その光景に私は、ウドンターニーという地域にとってのバーンチエン遺跡あるいはバーンチエン土器の重要性を強く感じた。

バーンチエン遺跡は、空港がある県庁所在地ムアンウドンターニー郡から西におよそ 60 km に位置する、ノンハーン郡チエン村にある。バーンチエン遺跡は、その存在が知られるようになった 1960 年代以降、タイ文化省芸術局やアメリカのペンシルヴァニア大学によって発掘調査が進められた。²⁾ 現在では否定されているものの、当時は出土した土器や青銅器の年代測定の結果から、世界最古の農耕文明であると騒がれて世界中の考古学者に衝撃を与えた。そのいわゆる「バー

ンチエン・ショック」は、中国とインドという二大大国の狭間にあつて「遅れた地域」であるという東南アジアに対する内外からのイメージを一新させた [新田 2007]。日本でも、タイからの依頼を受けた奈良教育大学の研究者らが土器の年代測定をおこなっている [市川・長友 1974]。遺跡の年代に関しては現在も決着がついていないが、B.C. 2500 年頃から稲作農耕がはじまり、B.C. 1100 年頃から青銅器の使用が始まったといわれている。いわゆるバーンチエン土器として有名な赤色の渦巻き紋が施された土器は B.C. 500 年頃以降の鉄器時代のものとされている。その考古学的重要性から、バーンチエン遺跡は 1992 年にユネスコの世界遺産に登録された。前年の「古都スコタイとその周辺の古代遺跡群」と「古都アユッタヤー」の登録に次いで、タイで 3 番目の世界文化遺産となった。世界遺産登録された 2 月には毎年、世界遺産フェスティバルやマラソン大会が開催されている。

先に世界遺産に登録されたスコタイやアユッタヤーの遺跡群は地上に巨大な建造物を多くもち、周辺はさまざまな施設を兼ね備えた歴史公園として整備されている。しかしバーンチエン遺跡は基本的に遺物や遺構が地中に埋まっており、そのような地上の建造物をもたない。遺跡からの出土品や発掘調査に関わる資料の多くはバーンチエン国立博物館に収蔵、展示されている。博物館近くのワッ

2) ペンシルヴァニア大学によるバーンチエン遺跡の調査研究は現在でも続けられており、Institute for Southeast Asian Archaeology のウェブサイト (<http://iseaarchaeology.org/the-ban-chiang-project/>) にその成果報告が逐次更新されている。最近では、遺跡からの出土品などのデジタルアーカイブが公開された。

トポーシーナイという寺院の敷地内では復元遺構が公開されている。また、遺物の一部はバンコク国立博物館の先史時代の展示室でも常設展示されている。ちなみに日本国内でも東京国立博物館の東洋館や南山大学人類学博物館ほか複数箇所で、土器や青銅器を見ることができる。

バーンチェン国立博物館

空港からバーンチェン国立博物館へのアクセスは良いとはいえず、観光客にとってはひとつの障壁となっている。最も安価な手段は空港からバスターミナルに移動してバスに乗り、途中でバイクタクシーに乗り換えるという方法であるが、タイ語の運用能力が試される。簡単なのは空港からレンタカーかタクシーを利用することであり、およそ1時間で到着する。

博物館に到着すると、まずバーンチェン土器を模した噴水のようなものが目に飛び込んでくる（写真2, 3）。周辺の土産物屋では近

隣の集落で作られている大小さまざまな土器が売られている。今回は訪れることが出来なかったが、集落では実際の土器製作の様子を見学することも可能である。博物館は1975年に開館したが、2010年に大幅に改装や増築がおこなわれたため明るく清潔な印象を受けた。タイの国立博物館の入館料には外国人とタイ人の区別があり、バーンチェン国立博物館の場合タイ人は30バーツ（約90円）、外国人は150バーツ（約450円）である。博物館の概説が書かれた無料のパンフレットは、タイ語や英語で書かれたものに加えて日本語版も用意されていた。2014年には、700～800人程度の日本人が訪れているとのことである。³⁾

展示は10のセクションから構成されている。そのひとつ目は、極めてタイらしいものである。「国王プーミポン・アドウンヤデート陛下とバーンチェン」というタイトルのその展示は、プーミポン前国王⁴⁾をはじめとする王族たちとバーンチェン遺跡、国立博物



写真2 バーンチェン国立博物館の入口



写真3 バーンチェン土器を模した噴水

3) 2016年3月26日に国立民族学博物館で開催されたフォーラム（『文化遺産の保存と活用—ミュージアムの観点から』）での中村真里絵氏の報告（「東北タイ、世界文化遺産バンチェン遺跡における博物館と地域住民」）より。



写真4 バーンチエン土器とプーミボン国王夫妻の遺跡訪問の様子

館の関わりを紹介するものである(写真4)。タイにおける考古学研究は王室と密接な関係にあり、⁵⁾他の国立博物館でも王族に関する展示があることは珍しくない。これはタイの博物館のひとつの特徴といえるだろう。その後は遺跡の発掘調査やその成果、世界遺産登録の経緯などに関する展示が続く。バーンチエンという土器のイメージが強いが、実際には金属器や玉類なども出土しており、その量や状態の良さには目を見張った(写真5)。出土品はもちろんのこと模型などを豊富に用いた展示は見応えがあり、また空調などの内装設備も充実しているため、⁶⁾考古学に興味のある人であれば数時間は滞在できるだろう。

最終セクションは「バーンチエンにおけるタイ・プアン族」というタイトルであり、現在この地域に暮らす少数民族であるタイ・プアン族の生活様式や慣習、伝統文化を紹介し



写真5 大量に出土している青銅製釧

ている。彼らは約200年前にラオスから移住してきた人々であり、バーンチエン文明の担い手とは関わりをもたない。しかしこの遺跡の発見以来、彼らは時として発掘調査に携わり、博物館で従業員として働いてきた。また土器を生産し、土産物として販売する人々もいる。

地域にとってのバーンチエン

バーンチエン遺跡は、現在この地に暮らす人々にとってどのような意味をもつのだろうか。バーンチエン遺跡の発見および世界遺産への登録は、この地域にかつてない注目を集める契機となった。地理的な条件や遺跡の性質上スコータイやアユッタヤーの賑わいには及ばないものの、それでも国内外から多くの人々が訪れる観光地へと変貌を遂げた。バーンチエン遺跡は世界遺産として、人々の日常生活にも少なからず影響を与えただろう。そ

4) 訪問の翌年、2016年10月に逝去された。

5) タイにおける「歴史学の父」と呼ばれるダムロン親王(ラーマ5世の異母弟)やその息子で「考古学の父」と呼ばれるスパトラディット・ディッサクン殿下、プーミボン前国王の娘でありシンラバコーン大学考古学部に修士号を取得しているシリントーン王女などが、考古学研究や博物館の設立などに大きく関わっている。

6) タイでは国立博物館であっても、空調やトイレなどがあまり整備されていない所もある。

して今やバーンチエン遺跡—というよりあの赤い渦巻き模様の土器—は、世界遺産であるという文脈を越えて地域のシンボルとして人々の生活のなかに根付いているのではないだろうか。ウドーンターニーの街中であの赤い渦巻き模様を見るたびに、それは地域の人々とこの土地を繋ぐシンボルのようだと感じた。

引用文献

- 市川米太・長友恒人. 1974. 「熱ルミネッセンス法による土器の年代測定Ⅱ」『奈良教育大学紀要』23(2): 3-13.
- 新田栄治. 2007. 「東南アジア考古学研究の現在」岩崎卓也・高橋龍三郎編『現代社会の考古学』現代の考古学 1 朝倉書店, 70-84.

日本の神社神職を彷彿とさせるマダガスカルのピアンジュ

江 端 希 之*

マダガスカル共和国の首都・アンタナナリボから北東へ21キロ、標高1,300メートル程度の高原地帯では、松・杉・ユーカリなどの木々が点在するイネ科草本に覆われたなだらかな丘陵が続き、その谷間には水田が広がっている。そこに、伝統宗教の聖地としての側面ももつ世界文化遺産「アンブヒマンガの丘の王領地」がある。アンブヒマンガの丘から谷をひとつ隔てたマンガベの丘の上には、ドゥアニ *doany* と呼ばれる民間信仰の「精霊祭祀の社」が複数存在し、巡礼者が国内外から訪れる聖地となっている。ドゥアニ周辺には、門前町としての機能をもつマンガ

ベ集落が存在する。

ピアンジュと神職の日常の共通点

2015年9月のある日、私は朝からマンガベにあるドゥアニのひとつ、ドゥアニ・ラスアラヴァブルに来ていた。ここの祭祀対象は、人魚とも貴人ともヴァジンバ（神話的先住民）ともいわれる女性ラスアラヴァブルである。ドゥアニには、境内を箒で掃き掃除するドゥアニの守護者（ピアンジュ *mpiandry*）がいた。白いイスラム風の丸帽子をかぶり、着古した洋服にマダガスカル製の腰巻を付けた、中年のメリナ人男性シャルロ氏¹⁾ であ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) メリナ人は、主にマダガスカル中央高原地帯に居住する主要民族のひとつ。16世紀以降メリナ王国を形成し、19世紀にはマダガスカル島のほとんどを支配下に置いたが、1897年にフランス植民地となって王国は滅亡した。メリナ王国には貴族・平民（自由民）・奴隷という身分階層が存在し、各階層はさらに細かい下位区分から成っていた。こうした身分階層意識は、こんにちの社会にも色濃く残されている。